様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０３２２８

研究課題名（和文）現代マレーシアにおけるイスラーム実践の「外縁」に関する実態調査研究

研究課題名（英文）An anthropological study of the Islamic practice at "the outer edge" of Islam in contemporary Malaysia

研究代表者
多和田　裕司（TAWADA, Hiroshi）

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：００２５３６２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、イスラームの「外縁」で観察されるマレー人ムスリムの実践の分析を通して、現代社会におけるイスラームの変容のありかたについて検討した。「外縁」とは、イスラーム教義と非イスラーム的、反イスラーム的な価値や生活スタイルとが出会う場を意味する。「外縁」上でなされた「クリスマス行事」「臓器移植」「性的多様性についての見解」についてのマレー人ムスリムの論争に焦点を当てることで、イスラームがイスラームの外部に起因する諸要因との交渉によって変容するものであることがあきらかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、イスラームの実践を、教義に規定されたものとして静的な視点でとらえるのではなく、フレキシブルに変わりうるものとして動的な視点でとらえたことに求められる。従来のイスラーム理解においては、教義と実践が結びつけられ、実践の持つ多様性はほとんど考慮されることはなかった。これにたいして本研究では、イスラームの「外縁」に着目することで、イスラームの外部に起因する事象によってイスラームの実践が大きく変容するという現代社会に適合的なイスラームの姿をあきらかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：This study reveals how Islam is transformed in modern society through an analysis of Malay Muslim practice observed at "the outer edge" of Islam. "The outer edge" means an arena where Islamic doctrine meets with the non-, and anti-Islamic values and lifestyles. By focusing on the dispute among Malay Muslims about "Christmas celebration", "organ transplantation" and "views on sexual diversity" at "the outer edge", it is clarified that Islam is transformed by the negotiation with the factors which originate from the outside of Islamic faith.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学　マレーシア　イスラーム　宗教実践

１．研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで現代マレーシアにおけるイスラーム実践をテーマに、現代社会に特徴的なイスラームありかたを理解すべく研究を進めてきた。ここ数年は科学研究費の助成を受け、ムスリムのライフスタイル（2009 年～2011 年度）や、経済活動とイスラームの宗教的実践との相関（2013 年～2015 年度）などの主題のもと、イスラーム実践を、イスラームの理念とイスラームに外在する要因との相互作用のなかにとらえることを試みてきた。イスラームに外在する要因とは、たとえば男女平等などの「普遍的」とされる価値観、経済的利益の追求、消費社会におけるライフスタイルなどであるが、これらは、イスラーム法制やハラール認証制度などからムスリム女性のファッションにいたるまで、イスラームが実践されるさいのありかたに大きな影響を与えている。

本研究は、上記の課題遂行のなかで新たに見いだされたイスラーム実践の現代的ありかたをあきらかにしようとするものである。ムスリムの日常生活においては、しばしばイスラーム以外の宗教に端を発する、あるいはイスラームに反するような要素を含んだ行為が観察される。具体的には、クリスマス・シーズンのサンタクロースの仮装やパーティーの開催などの他宗教にかかわる行為、近年急速に進展した臓器移植など古典的なイスラーム規範からは「逸脱」していると思われるような科学技術の日常化、「普遍的」価値観によって支えられる性的多様性をめぐる議論等などを挙げることができる。

マレーシアの場合、ムスリムがイスラーム以外の宗教を実践したり、イスラームに反する行為をおこなったりすることは各州条例において禁じられており、例示したような行為は場合によっては処罰の対象となる可能性を有している。あるいは、たとえ処罰にはいたらなくとも、一部のムスリムからは非難を受けるような種類の行為であることは間違いない。

本研究は、ムスリムの非イスラーム的（場合によっては反イスラーム的）な行為がぎりぎり許される地点をイスラーム実践の「外縁」ととらえ、個々のムスリムにとって「外縁」がどのように構成され、またどのような要因によってそれが拡張・縮小するのかについての、実態的な資料の収集、分析を通して、イスラーム実践が有するダイナミズムをあきらかにするものである。

２．研究の目的

本研究は、マレー人ムスリムの日常生活におけるイスラーム実践の「外縁」について、実態調査によってその動態を把握することを目的としている。これによって、イスラームの実践が教義に回収される固定的なものではなく、ムスリム個々人がおかれた状況やそのなかでの解釈からなるダイナミックな行為であることがあきらかにされるとともに、とくに宗教の私事化や商品化が進行する現代社会に特徴的なイスラームのありかたをとらえるための新たな視点を提供することが可能となる。

具体的には、ムスリム実践の「外縁」に位置する行為として、商業化したクリスマスへの関与、臓器移植技術の利用、性的多様性の容認を検討の対象とすることで、消費社会の進展、科学技術の高度化、多様な価値観の広がりといった特徴を有する現代世界のなかでの、イスラームの変容（変容しないことも含めて）をとらえていく。ムスリムによるこれらの行為への関与は、古典的なイスラーム法学上は、いずれも非イスラーム的、反イスラーム的として否定的、批判的にとらえられてきたものである。しかし、現在、ムスリムやイスラーム社会のなかには、これらの行為を受容したり、あるいは積極的にかかわったりする者も存在する。これはイスラームの「外部」からの影響によるイスラームの変容とも考えられるものであり、その過程を詳細に跡づけることで、現代社会に特徴的なイスラームの姿が現れるのではないかと思われる。

３．研究の方法

本研究においては、研究期間の各年度に共通して、文献その他の資料収集、マレーシアでの実態調査、資料ならびに調査結果の整理・分析という三段階の方法によって研究を進めた。とくに毎年１ヶ月程度のマレーシアでの資料収集と文化人類学的実態調査が主たる研究手段であった。

具体的には、各年度を大きく 3 期にわけて研究を進めた。

第１期は 4 月から 7 月までの期間であり、先行研究の収集、問題点の整理、海外調査に向けての準備作業等をおこなった。先行研究については、マレーシアならびに東南アジアのイスラーム社会を対象とするものに重きを置きながらも、他のイスラーム圏における同種の研究動向や他宗教における宗教実践の研究についても網羅的に収集、整理した。これらの作業と平行して、研究代表者がこれまで積み重ねてきたマレーシア・イスラームについての研究を、イスラーム実践の「外縁」という観点からいまいちど精査した。

第 2 期は 8 月から 9 月までの期間であり、この期間に 30 日程度の海外での資料収集ならびに実態調査を実施した。調査地としては、マレーシア・クアラルンプール市と、ムスリムが人口のほとんどをしめるクランタン州（とくにパシル・プテー郡）を対象とした。また、とくに研究初年度（平成 28 年度）には、比較の視点を得るために、マレーシアとは対照的な宗教状況

が観察できるシンガポールにおいても短期間の調査をおこなった。
　海外での調査活動は、3 カ年に共通して(1)文献等資料の収集、(2)関係者への聞き取り、(3)文化人類学的な実態調査からなるが、それぞれの研究年度において、ムスリムにとっての「クリスマス」(2016 年度)、「臓器移植」(2017 年度)、「性的多様性」(2018 年度)を個別テーマとして設定し、集中的に資料を収集した。比較対象都市（シンガポール）においては、消費社会であるという共通点と、多宗教社会においてムスリムが占める割合や宗教行政の違いを念頭に置きつつ、シンガポールのムスリムにとっての「外縁」を概観的に把握し、比較研究のための基礎的資料を入手した。
　第 3 期は海外での資料収集終了後年度末までの期間であり、持ち帰った資料の分析と、当該年度における活動の総括として研究論文を作成するとともに、次年度への課題を整理した。

４．研究成果

　本研究では、イスラームの「外縁」上でおこなわれるイスラーム実践の分析を通して、イスラームの外部に由来する事象がイスラーム解釈や行為を変容させることがあきらかにされた。もちろん、事象によっては変容を生じさせないものもあるが、これらの変容の状況（変容しないことも含めて）自体が、現代社会におけるイスラームのありかたを示すものであると考えることができる。以下、本研究で具体的な分析の対象として取り上げた事象にそってイスラームの変容を詳述する。

(1) ムスリムのクリスマス行事への参加
　ムスリムのクリスマス行事への参加の是非は、マレーシアにおいて近年繰り返し論争となる事柄のひとつである。イスラーム主義的な傾向を強く有するムスリム知識人や政治指導者のなかには、クリスマス行事への参加を一切認めないだけではなく、ムスリムが非ムスリムにたいして「メーリー・クリスマス」等の祝意を述べることすら否定する者も多い。一方これにたいして、祝意を述べることも含めて、行事への参加を可とする者や、実際にクリスマスにあわせてパーティーなどを開くムスリムも存在する。
　今回の研究では、ムスリムのクリスマスへの関与についての実態を把握するとともに、彼・彼女らの考えについて、より具体的な聞き取りをおこなうことができたが、ムスリム知識人や政治指導者らとおなじく、一般のムスリムにおいてもクリスマスへの一切の関与を否定するものから問題なしとする者まで、その見解は多岐にわたっている。クリスマス行事へ（積極的と消極的とを問わず）関与するムスリムの間では、クリスマス行事を宗教行事への関与という意識ではなく、たんなるイベントとしてとらえている者が多い。彼・彼女らの間では、クリスマス行事については、消費活動（クリスマス時期のセール）や非ムスリムを含む知人たちとの交友の機会という面が強調されている。
　多宗教・多民族国家であるマレーシアにおいては、各宗教の行事は公的にはたがいに尊重しあうべきものとされ、宗教間（つまりはムスリムと非ムスリムの間）の共存が社会的価値の中心におかれている。他方で、経済発展と消費社会化の進展に伴い、近年とくに、宗教行事を含めた様々な機会が商品化されるという現状が存在する。このような国家的、社会的背景を考えるとき、ムスリムにとってのクリスマス行事への参加は、たんにイスラーム教義によってのみ判断されるものではないと考えられる。商品化されたクリスマスは、宗教を問わず参加しうる行事となり（もちろんそれ自体を批判するムスリムは存在するが）、民族間の共存、協調をはかるには格好の機会である。同時に、経済的利潤追求という論理に照らしてもクリスマス行事を否定することは難しい。つまり、多民族性や急速な消費社会化というマレーシアの現代的背景によって、他宗教の行事への参加を是とする方向へ、イスラームの教義解釈や実践が変容したと考えられるのである。

(2) ムスリムからみた臓器移植
　臓器移植や「脳死」による死の判定など科学技術によって可能となった身体にかんす技法は、人間の死とこの世の終末における復活、死にあたっての魂と身体の分離および来世での両者の再結合等々からなるイスラームの伝統的な死生観からは、あきらかに容認できないものを含んでいる。
　しかしながら、イスラーム世界全般においては、1980 年代以降、世界的なイスラーム組織や各国のイスラーム関係機関、著名なイスラーム指導者などから、臓器移植を容認する、あるいは積極的に奨励するようなファトワ（イスラーム教義に基づく勧告）が提出されるようになってきている。マレーシアにおいても世界的な教義解釈の変更と歩調をあわせるように、各州が臓器移植を容認するファトワ（マレーシアの場合、ファトワはイスラーム教徒にたいして法的拘束力を持つ）を発布している。
　他方、マレーシアの医学界においては、臓器移植技術の進展に伴い、保健省を中心に、臓器移植や脳死判定にかんする様々なガイドラインや政策方針を定めているが、これらの手続きは、医療倫理や移植のさいの各種手順について、国際的にも共通するものとなっている。
　ところで、臓器移植を是認するファトワと各種医学的ガイドラインを比較すると、両者はその内容面でほとんど重なりあっている。すなわち、両者ともに、臓器提供者個人の意志確認、

移植がもたらす恩恵や有益性についての考慮、商業目的での移植の禁止など、表現の上での相違はあっても内実としてはおなじことを臓器移植の条件として挙げているのである。マレーシアを含むイスラーム社会全般におけるこの一連の動きは、イスラーム教義解釈と科学技術との漸近的な習合であり、イスラームから見れば新たな科学技術というイスラームの外部の力によるイスラームの変容ととらえることができる。

ただし、正確を期するために、臓器移植の容認は現時点ではあくまでも公的なイスラームのレベルにとどまっており、一般のムスリム、とくに地方に居住し、臓器移植そのものの知識が乏しいムスリムの間では、否定的に感じている者も多いことを指摘しておかなければならない。科学技術の進展などのイスラーム外的要因がイスラームを変容させるという、本研究における仮説的命題を検証するために、今後、臓器移植を是とする流れが公的レベルを越えて広く一般のムスリムまでに広がるか否かについて注目していきたい。

(3) LGBT などの性的多様性への見解

性的多様性の尊重は西洋世界を中心に現代世界における「普遍的」価値とも言える状況にある。しかしイスラームにおいては同性愛などに代表される性的多様性を認めないという教義解釈が主流をなし、マレーシアをはじめとするムスリムが多数を占める国家においては、LGBT の人々にたいして否定的であるばかりか、罰則規定を有している国も多い。イスラームで主流となっている見解では、性的多様性の否定はコーランにおけるルート（ロト）とソドムの物語に由来するものであり、神の言葉としてのコーランが同性愛を理由にソドムの人々を懲罰したということが、性的多様性を認めない理由としてしばしば言及される。しかし近年の「普遍的」な価値の広がりとともに、ムスリムの間でも、とくに同性愛者のムスリム知識人のなかから、さまざまな多様性もまた神の創造物であるという観点をもとに、性的多様性を含むすべての多様性を容認すべきとの、新しい教義解釈が生み出されている。

マレーシアの現状を見ると、イスラーム主流派の解釈に基づき、主として各州の刑法条例によって（マレーシアではイスラームは各州の管轄事項であるため、それに関する実定法は州条例という形を取る）、同性間の性行為や公共の場での異性装などが処罰の対象として法制化されている。実定法以外にも、さまざまな明示的、暗示的規制によって、性的多様性を一切認めないような形でのセクシュアリティの統制が計られている。これは 1980 年代から加速した社会のイスラーム化（およびイスラーム化政策）と当時のマハティール首相によって打ち出された「アジア的価値」の主張によっても大きく影響されている（同性愛は西洋社会の退廃的価値であると強調された）。

このような状況のなかでも、近年の世界的な性的多様性擁護の動きと連動して、LGBT の人々や人権問題としての性的多様性擁護を求める人々からの、各種イベントや法廷闘争（個人の自由を定めたマレーシア憲法との関係を問うなど）といったさまざまな活動がおこなわれるようになった。しかしいずれの活動についても、イスラーム主流派の「力」の前では、圧倒的に無力であり、わずかながら多様性容認へとつながるかもしれない可能性は見いだしうるものの、それが社会的に定着するにはいまだ遠い状態にあるといえよう。

(4) イスラームの「外縁」におけるイスラーム実践

現代のムスリムも、消費社会の進展、科学技術の高度化、多様な価値観の広がりなど、現代社会を生きるすべての人々に共通する経験に直面している。上記三つの事象について検討したように、これらのなかには、イスラーム教義や古典法学における教義解釈に矛盾したり、反したりするものも多い。一方で、現代社会を生きるムスリムのなかには、非イスラーム的、反イスラーム的とされてきたものを積極的に享受したり、容認したりする者が多く存在している。

現代社会におけるイスラーム実践にかんして、古典法学上否定されてきたにもかかわらず、現在のムスリムにとっては肯定否定を含めた多様な考えや行動が存在するという事実は、現代社会におけるイスラームのダイナミックな姿を示すものと考えることができる。すなわち、イスラームは教義のなかに固定されて存在するのではなく、さまざまな社会的状況や個々のムスリムの実践のなかで動的に作り替えられているのである。

本研究は、現代社会に共有された非イスラーム的、反イスラーム的社会状況や価値観が、イスラーム教義やムスリムの行動を変えうるのか否かという問いから出発している。上記の通り、その結果は、教義解釈の変更をもたらしたもの、実質的に変更されたと考えることができるもの、従来の解釈が維持されたままのものと、多様である。また指導者や知識人層と一般のムスリムとの間に、実践おける違いも存在する。このような違いが生じる理由については、残念ながらまだ確定的な結論にいたっていない。この点をあきらかにすることが、現代社会におけるイスラームをより十全に理解するための鍵になると考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 多和田裕司、現代マレーシアにおけるイスラームとセクシュアリティ、人文研究、査読有、第 70 巻、2019、pp.110-128.
http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/il/meta_pub/G0000438repository_04913329-70-113

② 多和田裕司、マレーシアにおける臓器移植とイスラームの倫理、人文研究、査読有、第 69 巻、2018、pp.41-58.
http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/il/meta_pub/G0000438repository_04913329-69-41
③ 多和田裕司、マレー・ムスリムたちのクリスマス：ムスリムの行為におけるイスラーム外的要因、人文研究、査読有、第 68 巻、2017、pp.25-41.
http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/il/meta_pub/G0000438repository_DBd0680003

〔学会発表〕（計 0 件）

６．研究組織

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。